

主 題：全ての始まり：永遠のことば

聖書箇所：ヨハネの福音書 1章1－2節

私たちは先週から、ヨハネによって記されたこの福音書を一から学び始めました。今回は実際の内容には入らずに、福音書全体の概観を三つの質問を通して考えました。

1. ヨハネの福音書を記したのはいったいだれか？

その答えはヨハネでした。十二弟子のひとりでもあり、約3年もの間、イエス様と個人的に時間をともにしていたヨハネ。そんな彼が、自分自身が目の当たりにしたすばらしい主の姿を晩年になって振り返りながら記したのです。でも、この著者のことを考える時に、一つ不思議なことがありました。それはこの福音書を通して、ヨハネは著者である自分の名前にはいっさい触れずに、自分のことを「イエスが愛された弟子」と繰り返していたことでした。彼はいったいどうしてこんな表現を用いていたのでしょうか？高慢になっていたがゆえにこの表現用いていたのでしょうか？そうではありませんでした。ヨハネはかつてはかたくなな人物で、さまざまな弱さを覚えていました。そして、自分の弱さも、愚かさも、足りなさも、かたくなさも、罪深さもよくわかっていた彼は、そんな自分にさえ及ぶイエス様の愛というものに、ただ圧倒されていたのです。余りにも信じられない、自分には決して値しない愛をイエス様から受けたことを感謝していたヨハネは、自分のことをただイエス様が愛してくださった弟子にすぎない、「イエスが愛された弟子」と言い表していたのです。このヨハネの福音書は、イエス様の愛を個人的に知った人物によって書かれたものでした。

2. ヨハネの福音書が記されたのはいつか？

そしてその答えは、紀元後80年代半ばから90年代ごろでした。先週も言いましたけれども、これも別に意味のない単なる数字ではありませんでした。私たちがこの年代のことを覚える時に、ヨハネがこの福音書を記していた時、彼を除く11人の使徒たちはもう既に亡くなっていたことを私たちは知っています。同じようにイエス様と時間をともに過ごして、同じようにしてイエス様とともに食事をし、同じようにイエス様とともに学び、同じようにともにさまざまな困難をくぐっていた兄弟たち、友人たち、家族は信仰のゆえにひどい苦しみに遭い、最後には殉教していきました。ひとり残されたヨハネは、果たして迫りくるその死の危険に恐れや不安を抱いていたのでしょうか？信仰ゆえに伴うその痛みや孤独を前にして、彼は喜びや熱意を失って、もう主のために忠実に歩むことをやめていたのでしょうか？そうではありませんでした。イエス様に従順に従っていく時に、大きな苦難や犠牲を伴うことをヨハネはだれよりもわかっていました。それでもなお、彼はイエス様を知り、イエス様に信頼できるということこそ、すべてのものにまさってすばらしいと確信していたのです。このヨハネの福音書は、たとえ苦しみの中にあろうと、たとえどんなものを犠牲にすることになったとしても、それにまさるイエス様のすばらしさを個人的に知っていた人物によって書かれたものだったのです。

3. ヨハネの福音書が記されたのはなぜか？

そして、その答えをヨハネ自身がはっきりと口にしていました。ヨハネ20:31に、こう書いていました。「しかし、これらのことが書かれたのは、イエスが神の子キリストであることを、あなたがたが信じるため、また、あなたがたが信じて、イエスの御名によっていのちを得るためである。」と。言いかえれば、この福音書は、私たちがただ知識を蓄えるために与えられていた書物ではありませんでした。ヨハネの福音書はすべての人にとって欠かすことのできない救いを、神の御子イエス・キリストにあるその希望と永遠のいのちを見出すことができる神様のことばだったのです。

この学びを通しての何よりの願いは、私たちひとりひとりがきのうよりもきょう、きょうよりもあす、イエス・キリストを個人的に知る者として成長していくことです。そして今、私たちの目の前にあるこのヨハネの福音書は、何の力もないものではありません。どんな時も、この神様のことばは、私たちを圧倒させるイエス様の愛を教えてくれ、どんな時も私たちを支えるイエス様のすばらしさを教えてくれ、そして何よりイエス様にある救いと永遠のいのちを教えてくれるものなのです。

○ “ことば”に関する三つの特徴

先週、私たちは具体的な内容に入る前に、そのようにして旅の準備をしました。きょうは実際にみことばに入ってみましょう。これから見ていくヨハネ 1：1-2 の箇所をお読みします。

ヨハネ 1：1-2

「1 初めに、ことばがあった。ことばは神とともにあった。ことばは神であった。2 この方は、初めに神とともにおられた。」

私たちはきょう、この“ことば”というものに関して、簡潔に言えば、ことばであるイエス・キリストに関して、特に三つの特徴を考えてみたいと思います。ヨハネは最初に、“ことば”というものの三つの特徴を私たちに教えてくれていました。

1. ことばの永遠性 1 a 節

まず一つ目の特徴は、ことばの永遠性です。ヨハネはこんなことばで福音書を始めていました。「初めに、ことばがあった」と。

▶ 「初めに」

この「初めに」という出だしを耳にした時、すぐに別の箇所が頭によぎった人はいますか？教会学校でもなじみのあるような箇所でしょう。「初めに」と言われれば、私たちは創世記 1：1 を思い出します。聖書の 1 ページ目、私たちが聖書を開く時に一番に目にする箇所、改めてそこは「初めに、神が天と地を創造した。」とあります。もちろんこれは偶然ではありません。ヨハネはここで適当にことばを選んでいたのでないのです。彼は意図的に「初めに」ということばを用いることによって、読者たちの目をすべての始まりへと向けようとしていたのです。世界が誕生するそれよりも前、すべてのものが生まれるそれよりも前、“ことば”というものは確かにそこにいました。永遠の初めから、“ことば”であるイエス・キリストは常に存在していたということを教えようとしていたのです。

▶ 「あった」

そして、そのことをさらに強調するために、ヨハネはこの箇所で「ことばがあった」と口にしました。この「あった」という動詞には、ギリシャ語の未完了形が使われています。難しいことはとりあえず置いておいて、この未完了形というのは簡潔に言うと、「過去における継続」というものを表していました。現在形というのをよく目にしますが、これは現在の進行、現在の継続を表します。この未完了形というのをここに当てはめて言うと、“ことば”というのは、過去においてある時はあって、ある時はなかったという話にはならないということです。“ことば”というものは最初からあり続けていました。過去を振り返ってみる時に、そこに“ことば”が存在していないタイミング、存在していない状況を一度として見つけ出すことはできないということです。この世界にあるものは、もちろん全然違います。神様が「光よ。あれ」と言われると光ができました。神様が「天の下の水は一所に集まれ」と言われると海ができました。神様が「水は生き物が群がるようになれ」と言われると、魚が生まれました。すべてのものには始まりがあったのです。でも、“ことば”は初めから変わらずに存在しておられたお方でした。

私たちがイエス・キリストがこの地上に来られたことを覚える時に、人として地上に来られる前の姿を忘れてしまうことがあるかもしれません。人として地上に来られるその前、当然ですけれども、イエス様は存在していなかったわけではありません。布にくるまれて飼葉おけに寝かされたその時が、イエス様のすべての始まりだったわけではありません。“ことば”であるイエス・キリストには始まりも終わり

もありませんでした。すべての初めから、どんな時も変わることなく、永遠の神様としてあり続けていた存在だったのです。イエス様ご自身もこのように口にされていました。ヨハネ8：58に「イエスは彼らに言われた。「まことに、まことに、あなたがたに告げます。アブラハムが生まれる前から、わたしはいるのです。」」と。また、パウロも同じことを教えていました。コロサイ1：17に「御子は、万物よりも先に存在し、万物は御子にあって成り立っています。」とありました。“ことば”であるイエス・キリストは、すべてのものよりも前におられたお方でした。この方が存在しなかった時は、一度としてありませんでした。「初めに、ことばがあった」、御子はすべての始まり、永遠なる神様でした。

2. ことばの偉大さ 1b節

次に、“ことば”に関する二つ目の特徴を考えてみましょう。二つ目は、“ことば”の偉大さです。今見たように、永遠に存在している“ことば”——イエス・キリストは、同時にすべてのものにまさって、偉大なお方でした。そして、今から私たちがすることは、この“ことば”ということばについて考えていきます。

これまで不思議に思ったことはありませんか？この福音書を記すに当たって、ヨハネが最初から自分の愛したイエス様に焦点を置いていたということはもう言うまでもありません。でももし最初からイエス様に焦点を置いて書いていたのであれば、どうして彼は冒頭からイエス・キリストという名前を使わなかったのでしょうか？実際、1章を見ると、イエス・キリストという名前が最初に登場してくるのは、なんと17節です。1：17までイエス・キリストという名前は出てきません。17節に初めて、「恵みとまことはイエス・キリストによって実現したからである。」とあります。1：1「初めに、イエスがおられた」で始まってくれているならば、私たちにとってそっちの方がわかりやすかったかもしれません。でも著者であるヨハネは「初めに、ことばがあった」と口にしたのです。これにはいったいどんな意図があったのでしょうか？いや、そもそもこの“ことば”という表現には、どんな意味が込められていたのでしょうか？

そのことを理解する上で、一つ覚えていてほしいのは、ヨハネはこの時、ユダヤ人とギリシャ人、幅広い読者たちに対して、この福音書を記していたということです。マタイはユダヤ人に対して記しました。ルカは主に異邦人、ギリシャ人に対して記しました。ヨハネはどちらにも書いていたのです。この当時の世界を想像してみてください。この手紙をヨハネが書いたころ、イエス様が地上を去ってからすでに約50年たっていました。つまり、その間に福音は幅広く宣べ伝えられ、ユダヤ人だけではなく、ギリシャ人、異邦人もイエス・キリストについて聞くことになっていたのです。ペテロが働き、パウロが働き、いろいろなところに出て行ったのです。そうしてたくさんの人たちが恵みによって救いへと導かれていきました。でも時間の経過とともに、人々の間にはキリストについて間違った考えや教えも広まるようになっていました。ヨハネがペンを執った時、ヨハネは当然、その状況のことをよくわかっていたでしょう。ユダヤ人、ギリシャ人の間で、愛するイエス・キリストに関して、誤解や混乱を覚えるような者たち、そういった教えが数多く出てきていました。そして、そんな状況を覚えた上で、ヨハネはこの福音書を書きました。そして、この書を手に取った者たち、この書を耳にした者たちがだれであれ、真っ先に興味を惹かれる、真っ先に関心を引かれることばでヨハネは始めたのです。そしてそのことばが“ことば”でした。ユダヤ人であれ、ギリシャ人であれ、この“ことば”というものは、そのどちらにとっても親しみのある、どちらにとっても非常に重要な意味が含まれていたのです。具体的にどういうことなのか、その内容を考えてみましょう。

▶ユダヤ人にとっての“ことば”

ユダヤ人にとって、“ことば”とはどのようなものだったのかというと、いろいろなことが挙げられま

1) 神様の圧倒的な力を指すもの

一つは“ことば”というのが神様の圧倒的な力を指すものでした。ご存じのとおり、旧約聖書に精通していたユダヤ人たちにとって、“ことば”というものは神様が持つておられる、ほかに並ぶものがない力を表すものでした。例えばこの世界のすべてを創造された時、神様は何を用いました？神様はご自身の語ったことばを用いたのです。創世記1：3に「神は仰せられた。「光があれ。」すると光があった。」と書いていました。詩篇33：6にもこう書いていました。「【主】のことばによって、天は造られた。天の万象もすべて、御口のいぶきによって。」と。ですから、ユダヤ人がことばと聞いた時、彼らの頭には創造における力強い神様のことばが思い浮かびました。でも、その創造だけではありません。それに加えて、例えばひどい苦しみの中にあって、何の助けも見出すことのできないような無力な人々の上に救いをもたらすことのできるものでもありました。“ことば”というものは、神様が救いをもたらす手段であって、その力でもあったのです。詩篇107：20を見てみると、「主はみことばを送って彼らをいやし、その滅びの穴から彼らを助け出された。」と書いていました。ですから、“ことば”という表現を耳にした時、ユダヤ人の頭の中にはまず神様の圧倒的な、全能なる力、創造し、救いを与える圧倒的な力が頭に浮かんだのです。

2) 神様のご自身を明らかにする手段を指すもの

加えてもう一つ挙げるとすると、その一つは、“ことば”というのは神様のご自身を明らかにする手段を指すものでした。“ことば”は圧倒的な神様の力を表すだけではありません。これは当たり前聞こえるかもしれませんが、私たちが同じです。私たちはほかの人が何を考えているかをどうやって知るかということ、その人が実際にことばをしゃべってくれた時に、そのことばを通して知るのです。ずっと黙ったままでいると、私たちはその人が何を考えているのかわからなかったりします。同じように、もし神様のご自身のことを何も明らかにしてくださらなければ、私たちには神様の考えを知る由もありません。でも、改めて考えてみてください。旧約聖書において、神様はご自身の存在や性質、さまざまなご計画を確かに繰り返し明らかにされ続けていましたが、どのようにしてそれをなされていたでしょう？それはことばを通してでした。神様は直接もしくは預言者たちに“ことば”を与えることを通して、ご自身の考えを人々に明らかにされていたのです。

旧約聖書を見ていけば、そんな場面はたくさん出てきます。例えばアブラムもそうでした。創世記12：1に書いていますが、「【主】はアブラムに仰せられた。「あなたは、あなたの生まれ故郷、あなたの父の家を出て、わたしが示す地へ行きなさい。」と。こうして神様はことばを用いて、アブラムにご自身の考え、ご自身の命令やご計画を教えられていました。それだけではありません。例えば、預言者エレミヤもそうです。エレミヤ1：4はこんなことばで始まっていました。「次のような【主】のことばが私にあった。」と。エレミヤだけではありません。エゼキエルも同じでした。エゼキエル1：3を見ても、「カルデヤ人の地のケバル川のほとりで、ブジの子、祭司エゼキエルにはっきりと【主】のことばがあり、【主】の御手が彼の上にあった。」と。また、旧約聖書の最後、マラキにしても1：3にこんなふうに書いていました。「宣告。マラキを通してイスラエルにあった【主】のことば。」と。

こうして神様は、ご自身のことを“ことば”を通して人々に明らかにされ続けていました。旧約聖書に精通していたユダヤ人たちは、当然そのことをよくわかっていたのです。“ことば”という表現を聞いた時、彼らのうちにはそれが神様がご自身を明らかにする手段であることが浮かんでいたのです。

▶ギリシャ人にとっての“ことば”

ギリシャ人にとってどのようなものだったかも考えてみましょう。言うまでもなく、ギリシャ人にとっても“ことば”というのは非常に大きな意味を持っているものでした。彼らにとって“ことば”、ギリシャ語で言う“ロゴス”は、この世界のあらゆる物事の裏側に存在する力や法則を指していました。ギリシャ哲学者たちは、物事の裏側に存在している力が、いったい何なのかを見出したいと昔から探し求め続けていたのです。例えば紀元前560年には、ヘラクレイトスと呼ばれる哲学者がいました。彼は「誰も同じ川に二度入ることはできない」ということばを残した人物でもありました。これが何を言わんとし

ているかという、ある人が一度川に入って足を浸けて、そしてそこから一度出て、もう一回川に入ったとしても、その人はさっきと全く同じ水に浸かることはありません。川がずっと流れ続けているから、2度目に入る時の川の水は、さっきよりも上流を流れていた水になるからです。だから彼はだれも同じ川に二度入ることはできないと言ったのです。すべてのものは絶えず変化し、すべてのもので変化しないものはないということを主張していたのです。こういう考えを持っていた彼にも、一つの疑問がありました。それは、この世界のあらゆる物事が絶えず変化しながら川のように流れていっているのであれば、どうしてすべてのものが無茶苦茶になってしまわないのだろうか？すべてのものが流れている状態で周りを見渡した時に、無秩序な状態にならずに、どうして秩序や一致が保たれているのだろうかということでした。そして、その問いに対して彼がたどり着いた答えは、あらゆる物事の裏側にはそれらを支配している何らかの力が、何らかの法則が、言いかえればロゴスが存在していると考えたのです。

そしてこのような考えを持っていたのはヘラクレイトスだけではありません。その後登場した者たちも同じでした。例えば、ストア派と呼ばれる哲学者たちも、こんなことばを残していました。「星々をその軌道に留めているものは何なのか？潮の満ち引きを引き起こしているのは何なのか？朝夕が順序を狂わせずにやってくるのはどうしてなのか？季節が定められたときに巡ってくるのはなぜなのか？」、そして答えはこう言います。「すべての物事は、ロゴスによって支配されている。ロゴスは、世界を混沌ではなく秩序あるものにする力であり、世界を完璧な秩序のもとで動き続けさせる力である。」と。つまりギリシャ哲学者たちは気づいていました。この世界に起こっている、ありとあらゆる物事というのは、たまたま偶然起こっているわけではありません。自分たちが知らない、何かしらの大きな力がすべてを支配している、何かしらのすばらしい法則が、ロゴスが裏側に存在していると。そしてギリシャ哲学者たちは何を教えたと思います？裏側にあるそのロゴスというものを、力というものが何なのかを彼らは人生をかけて、すべてを費やして探求しようとしていたのです。ですから、ギリシャ人も同じでした。彼らがヨハネから“ことば”という表現を聞いた時、彼らのうちには真っ先に結びつくものがありました。彼らにとって“ことば”というのは、あらゆる物事の裏側に存在している何かしらの力、法則だったのです。

そしてこのような考えを持っていた者たちに対して、ヨハネははっきりと口にしました。「初めに、ことばがあった」と。ヨハネは言わんとしていました。「皆さんが耳にしたこのことばというものに対して、あなたはいろいろな考えを持っているでしょう。でも、私はこれからあなた方に本当のまことのことばを教えましょう、本当のロゴスを教えましょう」と。その“ことば”こそ、初めからおられたイエス・キリストなのだ。ユダヤ人たち、どう思ったと思います？ユダヤ人たちは、“ことば”というものを初めに見ました。「初めに、ことばがあった」、彼らは思ったでしょう、ことば、神の力なのだ。神の創造をもたらす、その圧倒的な力なのだ、神の啓示なのだ。それがイエス・キリストなのだヨハネは言うのです。イエス・キリストこそすべてを創造されたお方であって、イエス・キリストこそ父なる神様のもとから来られた、神様を明らかに解き明かすために来られたお方なのだ。来週詳しく見ていきますけれども、続き1：3に「すべてのものは、この方によって造られた。造られたもので、この方によらずにできたものは一つもない。」と書いています。これを聞いた時に、ユダヤ人たちにはすぐにわかったのです。地上に来られたこのイエス・キリストは、確かに圧倒的な力であって、神様の啓示なのだ。

ヘブルの著者も造り主であると述べていただけではなくて、神様は御子を通して語っているのだ、御子こそが神のことばなのだということを教えていました。ヘブル1：1-2に「1 神は、むかし父祖たちに、預言者たちを通して、多くの部分に分け、また、いろいろな方法で語られました。この終わりの時には、御子によって、私たちに語られました。神は、御子を万物の相続者とし、また御子によって世界を造られました。」と書いています。ヘブルの著者はそのことにすぐ気づきました。

でも、ギリシャの人たちも同じでした。先ほどお話したギリシャ哲学が持っていたその考えは、私たちの周りにもあふれています。どうしていろいろな物がごちゃごちゃにならないのか？どうして自然界

がこうなっているのかと。彼らが考えていたことは間違っていないませんでした。この世界におけるすべてのことは偶然起きているのではなく、すべてが完全に支配されていました。すべてを造り、そのすべてを完全に支配されている力というものがあつたのです。彼らはそれをロゴスとして、わからないものとして探し求め続けていました。だからヨハネは言うのです。あなた方が探し求めているそのロゴスは、イエス・キリストです。イエス・キリストこそがすべてのものをお造りになり、すべてのものを支配しておられる神のことばなのだ。コロサイ 1 : 17にも「御子は、万物よりも先に存在し、万物は御子にあって成り立っています。」と書いていました。イエス・キリストはまことの“ことば”、ロゴスでした。

こうしてヨハネは、この信じられない事実に人々の目を真っ先に向けさせようとしてしました。ユダヤ人であろうがギリシャ人であろうが、だれがこの福音書を手にとったとしても、彼らにとって最も身近で、親密でよくわかることばを通して、イエス・キリストこそ神のことばなのだということを明らかにしたのです。それほどこのイエス・キリストは偉大なお方でした。私たち自身、日々この方の偉大さを覚え続けているのでしょうか？私たちはここまでこの“ことば”であるイエス・キリストが、すべての初めからおられる永遠のお方であるということを、すべてを造った圧倒的な力でもあり、神様の啓示であるということも見てきました。でも、私たちがしたいのは、この知識を蓄えることではありません。だからぜひ自分のこととしてよく考えてみてください。

ヨハネは 1 : 1 を“ことば”というものを用いて始め、いろいろなことを記し、次に“ことば”が出てくるのは、1 : 14 です。ヨハネはことばの偉大さをわかっていました。そしてその“ことば”に関して、いろいろな説明を加えるのです。ヨハネが終着点としていたところは 14 節に書いていたことでした。「ことばは人となって、私たちの間に住まわれた。」と。初めからおられた“ことば”が人となられました。ほかに並ぶものがない力を持っておられるその神が、まことの“ことば”であるその方が、ある時人としてこの地上に来てくださったというのです。私たちは時に、この事実を余りにも当たり前のように考えているかもしれません。イエス様が私たちの罪のために救い主としてこの世に来てくださったという事実を、私たちは何か普通のこととして捉えているかもしれません。でも、私たちが覚えなれないといけないことは、ヨハネのことばを通して私たちが気づかなければいけないことは、イエス様は人として来られる前にどれほど大きな犠牲を払ってくださったのかということです。永遠であられる神様が、限られた時間でしか生きることのできない人間のために地上に来られました。創造主であられる神様が、被造物である人間のためにこの地上に来られました。圧倒的な力を持っておられ、すべてのものからほめたたえられるべきその“ことば”が、神様にかたくなに逆らう無力な罪人に仕えるために来られました。まことの神であられるそのお方が、神のあり方を捨てられないとは考えずにご自分を卑しくして十字架の死にまでも従ってくださったのです。“ことば”であられるお方が人として来てくださったことのすばらしさに、すごさに、ヨハネはどれほど感激していたでしょう。そしてその“ことば”であるイエス・キリストの愛を知っているのであれば、彼はどんなに喜んでいただいでしょう。私たちもこのヨハネ 1 章を通して知ることができます。いったいこの方はどれほどの犠牲を私たちのために払ってくださったのかと。どれほどすばらしい愛を私たちのために示してくださったのかと。そして、そのことを私たちが考える時に、この方のためにどんな犠牲を払って喜んで仕え、応答して歩んでいこうとするかです。“ことば”であるイエス・キリスト、御子は偉大なお方でした。それが、ヨハネが教えてくれる二つ目の特徴でした。

3. ことばの神性 1c-2節

そして最後、“ことば”に関する三つ目の特徴は、“ことば”の神性です。永遠に存在する偉大な“ことば”であるイエス・キリストは、間違いなくまことの神であられるお方でした。神様である神性です。ヨハネ 1 : 1b-2 にこう続いています。「ことばは神とともにあつた。ことばは神であつた。:2 この方は、初めに神とともにおられた。」と。ここで大切なことばが一つ使われていました。ヨハネはこの箇所「ことばは神とともにあつた」と述べていました。この「ともに」と訳されていることばには、だれかとだれかの

間にある個人的な関係や親密さを表す意味が含まれていました。要するに、“ことば”であるイエス様と父なる神様との間には、きわめて親密な関係が最初から存在していたということです。三位一体の神様との間には、永遠の初めから深い交わりや完全な愛がありました。こんなことばをイエス様ご自身も残していました。ヨハネ17：24の「父よ。お願いします。あなたがわたしに下さったものをわたしのいる所にわたしといっしょにおらせてください。あなたがわたしを世の始まる前から愛しておられたためにわたしに下さったわたしの栄光を、彼らが見るようになるためです。」と書かれています。父なる神様のその愛は、世の始まる前から永遠に続くものでした。永遠に存在しておられたその“ことば”は、永遠に存在しておられる御父と御霊と三位一体の神様との間にあるその交わりを、愛を、その個人的な親密な関係にあり続けていたと言うのです。私たちの理解には確かに到底及びません。でも、そのようにみことばは教えてくれていました。

でも同時に、“ことば”であるイエス・キリストは、ただ父なる神様とともにいるだけの存在ではなく、神様そのものでもありました。1節に「ことばは神とともにあった。ことばは神であった。」と書いていました。“ことば”は神でした。絶対に勘違いしてはいけません。イエス様は神様のようなお方であったのではありません。父なる神様に比べて劣っている、神様の性質の一部だけを持っている存在でもありません。“ことば”であるイエス様は確かにまことの神様でした。神様のご性質のすべてを持っておられるお方でした。だからこそ、父なる神様のうちに見られるものは同じようにして、すべて子のうちにも見ることができたのです。だからヨハネ10：30で「わたしと父とは一つです」、ヨハネ14：8-9では「：8ピリポはイエスに言った。「主よ。私たちに父を見せてください。そうすれば満足します。」：9 イエスは彼に言われた。「ピリポ。こんなに長い間あなたがたといっしょにいるのに、あなたはわたしを知らなかったのですか。わたしを見た者は、父を見たのです。」と、イエス様は何度も言われ続けていました。つまり父が永遠であられるように、子も永遠なるお方でした。父があわれみ深いお方であられるように、子もあわれみ深いお方でした。父が忍耐深く、柔和であられるように、子も忍耐深く、柔和なお方でした。父が聖く正しいように、子も聖く正しいお方でした。そして父が愛に富んだお方であられるように、子も愛に富んだお方でした。

このことを覚えた時にすごいのは、こんなまことの神様であられる御子イエス・キリストが、人としてこの世に来てくださったということです。いや、それ以上に私たちの罪のために十字架にかかって死んでくださったということです。イエス様は十字架の上で叫ばれていました。「わが神、わが神。どうしてわたしをお見捨てになったのですか」（マタイ27：46）と。これは、単純な嘆きのことばではありませんでした。このヨハネ1：1を覚える時に、このことばがいかにイエス・キリストにとって、主にとって苦しいものだったかを見て取ることができるのです。世の始まる前から、永遠に持つておられたその父との親しい関係、永遠の初めから父と子の間には深い交わりと愛のみが存在していました。でも、それが歴史上、この時初めて途切れたのです。「どうしてわたしをお見捨てになったのですか」と叫ばれたその時、父の愛しか味わったことのなかった御子は、私たちに代わって、罪に燃え上がる父の怒りを初めてその身に受けたのです。

愛する皆さん、果たして私たちは“ことば”であるイエス・キリストの正しい姿を覚えているでしょうか？恵みによって私たちに救いを与えてくださるため、この方が支払ってくださったへりくだりと犠牲的な愛に、私たちはふさわしい感謝を捧げ続けているでしょうか？『天路歷程』の著者として知られるジョン・バニヤンもかつてこんなことばを残していました。「ああ、祝福された御子。恵みがあなたの栄光を奪い、恵みがあなたを天から降ろし、恵みがあなたに言葉で言い表せないほどの罪と呪いの重荷を負わせました。恵みがあなたの心の内にあり、恵みが血を流すあなたの脇腹から溢れ出しました。恵みがあなたの涙にあり、恵みがあなたの祈りにありました。恵みが茨の冠をかぶったあなたの額から流れ、恵みがあなたを貫いた釘と茨と共に現れました。ああ、ここに計り知れない恵みの富があるのです！罪人を幸せにする恵み。天使たちを驚かせる恵み。悪魔を驚愕させる恵み。」と。私たちは日々ある種、口癖のよ

うに、「恵みによって救われます」、「私たちは恵みによって歩いていきます」と言います。でも、忘れてはいけません。その恵みを与えるために天から降り、この地上に来てくださった永遠の“ことば”がおられるということです。私たちに恵みとして救いを与えるために、だれも払うことのできない罪の代価のために、ご自身を犠牲にしてくださいました御子がおられるということです。ですから私たちが恵みによって救われるということ、恵みによって生かされているということは、私たちにとって感謝なことではありません。もし私たちが恵みを当たり前のように思っているのであれば、みことばに戻ることです。ヨハネ1：1に戻ることです。どんなお方が人として来てくださったのか、どんなお方が人として、私たちのために十字架にかかってくださったのか、どんなにすばらしい救い主が、神のあり方を捨てて、人として、神の御子として来てくださったのか、そのことを私たちは覚え続けることです。

ヨハネはそのような“ことば”をもって福音書を始めました。今週1週間も私たちはこの“ことば”を覚え続けていきましょう。イエス・キリストのすばらしさを自分のものとして知る者として、ともに成長していきましょう。